

激動する欧州の政治・経済情勢の把握と競争力を増すドイツ産業界を視察

経済同友会は、昨年10月の英国・フランスへの代表幹事ミッションに続き、2018年3月8日(木)～3月16日(金)の日程で、欧州にミッションを派遣した。新宅祐太郎 2017年度欧州・ロシア委員会委員長が団長を、成川哲夫 同副委員長が副団長を務め、団員5人を含む総勢11人がベルギー(ブリュッセル)とドイツ(ベルリン・フランクフルト・デュッセルドルフ)を訪問した。



■概要

ブレグジットに揺れる欧州の大陸側視点と存在感が高まるドイツの動向を把握

今回のミッションでは、日EU経済連携協定(EPA)が最終合意に至るなど、わが国にとってますます重要度の高まる欧州について、英国のEU離脱(ブレグジット)などに揺れる激動の政治・経済情勢と、産官学連携・イノベーションを軸に世界で競争力を増すドイツ産業界の最新動向の現地視察・調査を実施し、有識者や企業経営者との意見交換を行うとともに、人的ネットワークの強化・拡大を図った。

ブリュッセルでは、統合の拡大と深

化を遂げてきた欧州が、ブレグジットを受けてどう変容していくのか、各国の政治・経済情勢と日欧関係の今後の展望、ブレグジットが産業界に及ぼすインパクト、日EU・EPAへの期待などを探った。

ベルリンでは、英国離脱後のEUで存在感が増し、フランスと並んで主導的な役割を期待されるドイツについて、政府関係者、政治・経済分野の有識者との面談を通じ、3月14日に発足した第4次メルケル新政権の政策動向や経済状況について理解を深めた。

フランクフルトからデュッセルドルフでは、独自の技術革新と競争戦略に



EU日本政府代表部 兒玉大使 表敬



e.GO Mobile AG ソマー博士/販売統括 面談・視察

■団員名簿 (敬称略)	(役職は派遣時)
団 長/新宅 祐太郎	欧州・ロシア委員会 委員長 (テルモ 顧問)
副団長/成川 哲夫	欧州・ロシア委員会 副委員長 (日本曹達 取締役)
団 員/志岐 隆史	欧州・ロシア委員会 副委員長 (全日本空輸 取締役副社長執行役員)
三浦 善司	欧州・ロシア委員会 副委員長 (リコー 特別顧問)
吉丸 由紀子	欧州・ロシア委員会 副委員長 (ニフコ 執行役員)
随行員/西川 恭	(テルモ 執行役員 テルモヨーロッパ社 取締役社長)
戸田 真介	(みずほ銀行 欧州業務部長)
種村 守之	(全日本空輸 フランス・ベネルックス支店長)
竹村 倫人	(ANAホールディングス グループ経営戦略室 経営企画部 部長)

■ミッション日程 (2018年3月8日～16日)	
■3月8日	東京発→ブリュッセル着
■3月9日	●欧州委員会 面談 ●欧州理事会 面談 ●ビジネスヨーロッパ 面談 ●ブリュッセル欧州世界経済研究所(ブリュッセル) 面談 ●欧州政策研究センター(CEPS) 面談 ●結団式
■3月10日	●Brouwerij 3 Fonteinen 視察 ●兒玉和夫 EU日本政府代表部 特命全権大使 表敬・意見交換
■3月11日	ブリュッセル発→ベルリン(テゲル)着 ●日独産業協会 シュミット理事 夕食懇談
■3月12日	●キリスト教民主同盟(CDU) ドイツ連邦議会議員 懇談 ●八木毅 駐ドイツ連邦共和国 特命全権大使 表敬・意見交換 ベルリン(テゲル)発→フランクフルト着 ●日独産業協会 ヴィースホイ理事長 夕食懇談
■3月13日	●SAMSON AG 面談・視察 ●マックスプランク実証美学研究所 面談・視察 フランクフルト発→ケルン着 ●ドイツ経済研究所 面談 ケルン発→デュッセルドルフ着
■3月14日	デュッセルドルフ発→アーヘン着 ●アーヘン工科大学 視察 ●e.GO Mobile AG 面談・視察 アーヘン発→デュッセルドルフ着 ●ノルトライン・ヴェストファーレン州政府 面談 ●在欧州日系金融機関他 夕食懇談
■3月15日	デュッセルドルフ発→フランクフルト経由
■3月16日	東京着

より、着々とグローバル市場でのプレゼンスを拡大するドイツ発のグローバル企業のほか、研究機関やシンクタンク、大学発のスタートアップなども視察した。競争優位・イノベーションの源泉や事業承継のスキームなど、日本企業が取り組むべき喫緊の課題への示唆を多数得ることができた。

■総括

ブレグジットの行方、 欧州の現在・未来

ブレグジット交渉の先行きの不透明感から、有識者が頻繁に“Hard Brexit”や“Cliff Edge”に触れることが印象的だった。

刮目^{かつもく}に値するのは、EU加盟27カ国が合意した場合の2019年3月29日以降への離脱期日の延期という条約適用の可能性が水面下でささやかれている点だ。

またEUと英国の関係では、ブレグジット交渉の実務能力においてEU側が圧倒的に高く、交渉がEUペースで進捗^{しんちよく}する状況にある。

負のダメージも英国が甚大となる一方で、EU側はその経済規模と貿易相手の分散で十分にマイナス分が吸収可能とみられており、EUと英国の非対称性が鮮明になってきている。

他には、これらの点が日本で報道されていない事象であることから、英国側の情報に偏るのではなく、欧州の大陸側の特にEUの動向や交渉当事者の発言などにも、より一段と着目すべきとの有識者の指摘があった。

EUの盟主 ドイツの俯瞰

約半年の政治空白を経て連立政権を発足させたドイツには、国内外で今後一層複雑で困難な局面が待ち受けている。有識者からは、メルケル首相の強力なリーダーシップを期待する一方で、

任期後半はレームダック化するという見方があった。ドイツ情勢で、特に注視すべき点としては、学者や弁護士・議員経験者などの知識層を取り込み、単純なポピュリズムや右翼政党ではない新興勢力の「ドイツのための選択派」だ。

また、ブリュッセルとの関係では、EUの行政機構における、事実上の政策形成の原動力が、ベルリンやパリの官僚機構と言われている。その背景から大手の法律事務所や会計監査法人がベルリンでの態勢増強を進めていることが確認できた。

この他、EU加盟国内では、これまで健全財政派の「北グループ」と積極財政派の「南グループ」が均衡してきたが、英国がEUから離脱をすることで、南グループの影響力が増すことになり、EU統合への懸念要因となりかねないとの指摘もあった。

イノベーション、 価値創造戦略の事例調査

官学によるイノベーションとスタートアップの環境整備への積極的な牽引^{けんいん}をドイツで実感した。連邦政府からの先行投資や研究開発を対象とする支援に加え、州政府の基金が整備され、EUからの支援も合わせた「トリプルファンド」で技術革新を創出している。

研究開発では、マックスプランク研究所で基礎研究を、フラウンホーファー研究機構で応用研究を行う総合的な枠組みが確立され、大学や民間企業で高度人材の流動化が実践されている。また視察先のアーヘン工科大学では、研究開発を中心としたスタートアップの立ち上げも手掛け、産官学連携を強力に推進している点は、日本が参考とすべき取り組みだ。

大企業と政府のトップダウンで導入



SAMSON AG 面談・視察(1階 待合・展示コーナー)

を進めるドイツのインダストリー4.0については、バリューチェーン全体のデジタル化によって生産性・賃金の向上を目指している。

ドイツの産業競争力の中核を担い、多くが独自性を持った完成品メーカーで構成されるドイツの中小企業が、インダストリー4.0の推進に対して、その固有の競争力の埋没に懸念を抱いていることに大きな気付きがあった。

他にも、中小企業の経営判断や事業承継について、日本とドイツの特徴的な点を分析することができた。



欧州理事会 ハルトマン政務官 面談



ベルリン市内 視察(大聖堂・テレビ塔)



キリスト教民主同盟 ハウトマン議員 面談